

新領域創成科学研究科

I	教育の水準	教育 25-2
II	質の向上度	教育 25-5

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成27年度の改組により、全11専攻の中に14協力講座（学内8部局）と23連携講座（学外13機関）の教育体制とするなど、時代に即した新しい学融合教育に取り組んでいる。
- 当該研究科が中心となって修士課程及び博士課程の一貫教育を実施する「サステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム（GSPP-GLI）」に加えて、3件の「博士課程教育リーディングプログラム」に参画し、平成27年10月現在、合わせて125名の学生が履修している。
- 留学生や国際交流に対しては国際交流室で来日手続相談、生活情報提供、地域連携窓口サービス提供等の対応を行っている。また、適切な学生指導ができるように、教員に対するファカルティ・ディベロップメント（FD）を継続して実施している。第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）においては、テーマを毎回変えて年2回FD活動を開催し、出席状況は一回当たり100.8名となっている。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 「サステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム（GSPP-GLI）」では、修士課程でサステナビリティに関連する基礎的な知識とスキルを修得し、博士課程で国際経験とリーダーシップスキルを修得することで、あらゆるスキルを統合して学べるように工夫しているほか、全講義及び演習を英語で実施し、修了生にはサステナビリティ学の学位を授与している。
- 国際化を進めるため、共通科目では英語による論文の執筆法及びプレゼンテーション法の実践的な講義を実施しており、海外大学への交換留学生の派遣や受入活動を行っている。留学派遣者数及び留学受入者数について第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）と第2期中期目標期間を比較すると、留学派遣者数は19名から48名へ、留学受入者数は32名から57名へ、それぞれ増加している。
- 平成27年度には、学部1、2年次生を対象とする3泊4日の全学体験ゼミナール先端研究体験学習柏サイエンスキャンプに当該研究科受入分として60名が

参加しているほか、平成 25 年度から平成 27 年度の海外大学学部生を対象とする約 40 日間の夏季インターンシッププログラム UTSIP (Summer Internship Program in Kashiwa) の体験型教育プログラムに計 73 名が参加するなど、学部教育に積極的に取り組み、部局外でもその教育を実施している。特に、UTSIP は平成 28 年度事業 (募集時期は平成 27 年度) に対して 1,000 名以上から応募を受けている。

- 国際学術交流及び研究の充実を図るため、研究科独自の制度として国外における学会・研究集会での研究発表又はフィールドワーク等に対し、10 万円から 20 万円を支給する海外出張補助制度を平成 26 年度から実施しており、これまでに計 21 名の学生に対して支援を行っている。

以上の状況等及び新領域創成科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点 2-1 「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 日本人学生と外国人学生を一緒に教育研究指導するとともに、海外協定校への派遣及び国際会議での発表等を通じて学生の国際化を図っており、第 2 期中期目標期間における計 314 件の学生の受賞数のうち、国際会議での発表等による国際的な賞の割合は約 18%となっている。
- 各専攻の教育課程に加えて、4 件の「博士課程教育リーディングプログラム」に参画している。また、環境マネジメント (MOT) プログラム、メディカルゲノムサイエンス・プログラム等の 10 の教育プログラムによる第 2 期中期目標期間の修了生は計 512 名となっている。
- 平成 27 年度に実施した修了生アンケートの結果では、「専攻のカリキュラムに満足していましたか」、「新領域創成科学研究科での経験は現在の自分に活かされていますか」等の 5 項目に対して、約 8 割の学生が肯定的に回答している。

観点 2-2 「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 研究科主催の就職に関連するセミナーやジョイントワークショップへの企業参加数は、毎年度 100 社を超えている。

- 第2期中期目標期間における進路状況は、修士課程では平均 19.5%は博士課程に進学し、平均 63.2%は就職している。主な就職先は製造業、情報通信業、学術等サービス業、建設業、公務員関係等であり、就職者の8割以上の者が本人の希望する職業に就いている。博士課程では平均 54.0%は就職し、主に大学や企業等の研究職へ就職している。
- 平成 27 年度に実施した企業アンケートの結果では、修了生の魅力を感じる点として、「専門分野を深く学んでいる点」は 57.1%、「融合分野を学んでおり、視野が広い点」は 65.7%となっている。
- 修士課程及び博士課程の修了生が、学融合教育の成果として、生命科学・画像処理・数理工学・情報科学等の知識を駆使した画像解析システムのベンチャーを起業するなどしている。

以上の状況等及び新領域創成科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

II 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 大きく改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 「サステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム（GSPP-GLI）」を実施するとともに、3件の「博士課程教育リーディングプログラム」に参加しており、教育プログラムは平成21年度の8プログラムから平成27年度の10プログラムへ増加している。
- 平成25年度から海外大学の学部生を対象とする夏季インターンシッププログラム UTSIP、平成26年度から学部1、2年次生を対象とする3泊4日の全学体験ゼミナール先端研究体験学習柏サイエンスキャンプを実施するなど、国際的な学部教育に取り組んでいる。特に、夏季インターンシッププログラム UTSIPは平成28年度事業（募集時期は平成27年度）に対して1,000名以上から応募を受けている。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 学生の研究成果による国内外の学会での受賞数は、第1期中期目標期間の平均28.2件から第2期中期目標期間の平均52.3件へ増加している。
- 平成27年度に実施した企業アンケートの結果では、「融合分野を学んでおり、視野が広い点」を65.7%が修了生の魅力として回答し、修了生アンケートの結果では47%が研究科での経験が現在の自分に非常に活かされていると回答している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 平成25年度から海外大学の学部生を対象とする夏季インターンシッププログラム UTSIP、平成26年度から学部1、2年次生を対象とする3泊4日の全学体験ゼミナール先端研究体験学習柏サイエンスキャンプを実施するなど、国際的な学部教育に取り組んでいる。特に、夏季インターンシッププログラム UTSIPは平成28年度事業（募集時期は平成27年度）に対して1,000名以上から応募を受けている。

